路上生活から見えること ― ノラの活動と２４６キッチン

いちむら みさこ

私は今、東京の公園のなかにあるテント村に住んでいます。このような暮らしを始めて、6回目の冬をむかえています。現在このテント村には約40軒のテントがあり、その中で女性は、私を含めて4人。3人はそれぞれのテントに住み、ひとりはパートナーと一緒に暮らしています。

この村では、大きなお金に関わらずに、街で不要になった物を集め、それを分け合い、有効利用しながら暮らしています。この資本主義社会のど真ん中で、このような暮らしが独自に生まれ、築き上げられているということに、私はとても可能性を感じて住み始めました。さらに、外国人も、障がいを持っている人も、字が読めない人も、計算ができない人も、物を広げる人も、それはそれぞれの個性として、そのままの形で自分を発揮し、補いあいながら暮らせる知恵がこの村には潜在しています。もちろん、いろんな人たちが住んでいるので、ケンカはたえません。それもある程度は問題ないと思える継続的な関係がここにあります。

私が住み始めた頃は、300人ほどの住人中、女の人が30人ほどいました。そして、私は女性のためのティーパーティを月に1回開き、女同士でテント村のことを話し合い、それは安心して暮らしていくための重要な集まりになりました。

やがて、行政がこのテント村をなくすため、各地にある民間アパートへ生活を移行させる事業をはじめました。アそうして、約90パーセントの住人はテント村を去っていき先ほども申し上げたように、現在40軒のテントが残っています。

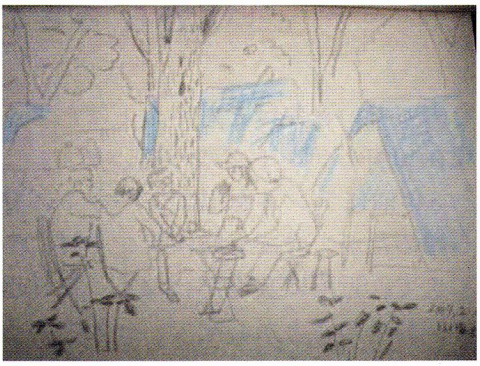
3年前にテントを出てアパートに暮らし始めたが、今でも時々テント村にやってきて、近所に友達がいなく、毎日退屈で、お金のことが心配で、一人でいることの不安を話す人は少なくありません。

残ったテントの住人に対して、行政は追い出しの圧力が強めてきました。その時私は、このテント村の生活から路上生活へ放り出されるかもしれないと思いました。路上生活は、寝る場所の確保や自炊、洗濯が難しくなり、物も保管できず、テント暮らしと全く異なっています。

私は路上生活者が利用をしている炊き出しや配給へ行ってみました。近くで行われているパンの配給は参加者300人以上のうち、女の人は7、8人程度です。

私は彼女たちに、「私のテントの前で一緒にパンを食べましょう。お茶を入れますよ」と誘いました。ティーパーティは、パンティーパーティという名前に変更しました。そして、「パンティーパーティ」は、女だけでなく、トランスの人も、女装をする人も一緒に、個性豊かな人たちが集まりました。パーティにはときどき、みんなに相談をしにやってくる人が訪れます。保護施設に住みながらアパート暮らしを目指していた人が、施設内でいじめがあり、施設をとび出してきたという人もいます。さらに、アパート暮らしを始めたが、働いても働いても孤

独で「耐えられない」と、このホームレスの繋がりの中へ帰って来た人もいます。



いちむらみさこ作（2007年2月）

路上生活者は、各地で開かれる教会や支援団体の炊き出しや配給をまわって暮らしている人が多いですが、体調を崩したり、気候が悪いと、移動できなくなり、そこにとどまっていることもあります。そうすると屋根のあるところに避難するためや食べ物を購入するために、お金が必要になってきます。しかし、路上で出回っている仕事は、健康な男の人ができる日雇い労働や、また、リスクの高い仕事ばかりです。

そうして、私はノラというホームレスの女の人が作っている月経用の布ナプキンのブランドを作りました。

布ナプキンを製作することは、私たちの存在をさまざまな女の人たちへ伝えたいということと、ホームレスへの偏見、つまり、不潔とか、コミュニケーションができないというイメージをくつがえそうと思いました。また、「家を出た」ということをポジティブに表現し、それらのイメージをブランドとして発信しようと思いました。

私は、パンティーパーティに来ている人をノラに誘い始めました。縫い物をしばらくしていない人ばかりでした。材料を渡して、一週間後作った分だけ、買い取るという事にしました。デザインを指定して、初めて作ってきてもらった物は、縫い目がふにゃふにゃでガタガタしていました。私は、これは、絶対他にない商品が出来ると、わくわくしました。また、布ナプキンを超えて、人形をつくってしまった人もいました。

私は、それらの商品を売り出しました。貨幣経済のネットワークは最強です。すぐに、いろいろな人と繋がっていきました。時々ノラ宛てで、テントに、糸や洋服、食べ物などなど、いろいろなものが送られてきます。現在ノラは、制作部、販売部、開発部の3本柱で運営しています。といっても、ほぼ3人から5人で細々と、ゆっくり作り、販売しています。一ヶ月に、30個くらい作っています。

ここで、ノラのメンバーの生活をお話したいと思います。

ノラのメンバーは、テントに住んでいる私以外、路上生活をしています。路上生活の女性はほんとうに大変です。

例えば、路上の寝場所が、何人か集まって何年もそこに寝ているにもかかわらず、座ってでしか寝られず、横になれないという人が少なくありません。それはチカンなど、性的な暴力を受けてからそうなったということです。

また、24時間営業しているマクドナルドをお金を払って普通に利用しているにもかかわらず、追い出されることがあります。出入り禁止を宣告され、ケーサツを呼ばれて強引に追い出されます。路上生活の女の人にとって、安全管理されていたり、また雨や雪をしのぐため、お店

に避難できることは、とても重要でした。しかし、大きな荷物を持っているということや、お店の雰囲気に合わない、また「ホームレスだから」ということで、お金を払っても、追い出されてしまいます。

寒い冬、夜をすごせる場所がなかなかありません。ビルの軒下さえも、ガードマンが追い出すところが多いです。ホームレスの男の人たちが集まって寝ていても、以前、男性からの暴力で怖い思いをしたことのある人は、普段気楽に話せるホームレスの男の人たちの中でさえ、横になって眠ることはできない女の人がいます。

女同士で集まることは、パンティーパーティやノラ以外、なかなかありません。同じホームレスの男の人たちが女の人を優先してくれることがよくあります。もちろん、それは助かります。ただ、そのような、女が希少な存在となると、女同士が競争に取り込まれます。同じ立場の女同士が集まると、希少ではではなくなるか、ライバルになってしまうので、ほとんど話しません。しかしその一方で、ホームレスの女同士は、実は、お互いの健康や安否がとても気になって、こっそり見守っています。それは自分と同じその立場が、安全で楽しめる可能性であってほしいからです。

私たちは、ノラの布ナプキンを大量生産できません。ノラは、コタツに入ってテレビをみながら作業をしているのではなく、雨風や、公権力、市民の差別にあおられながら、ひとはりひとはり縫っています。ふにゃふにゃな縫い目はそのためで、きれいになんて縫えるはずがないです。

次に、路上での出来事についてお話をしたいと思います。

ホームレスが集まって寝ることは安全を確保するためのひとつの手段です。しかし、ノラのメンバーの生活のように女の人は、男たちのそのコミュニティに入ることもとても難しいです。ですから、女もいられる場や文化を、根本的に作り変えなければならないと感じます。

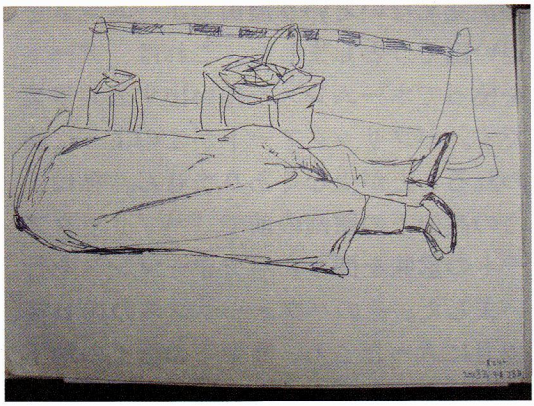
ある駅の近くに、高速道路と線路と国道が三段にも立体交差する場所があります。この高架下に、数人のホームレスがダンボールで小屋を作り住んでいます。2007年の秋、その街にあるアートの学校と町内会が、その高架下に壁画を製作しました。そしてその壁画が出来上がると、絵が見えないという理由でホームレスを追い出そうとしました。これは、アートを使ってホームレスを追い出す公共事業です。パブリックアートがこのように使われることが少なくありません。私は、この高架下の壁画の前で「パブリックアートの意味を問う」パフォーマンスを行いました。そのパフォーマンスの10日後、12月に入ったころ、高架下の近くの地下道で、少しでも寒くないところで仮眠をとっているホームレスをガードマンが追い出す出来事がありました。真冬の凍りつくような外気の中で眠ることは死活問題です。数日後、これについて支援団体が中心になった大きな抗議行動がこの街で行われました。

ところがこの次の日、とても恐ろしいことが起こりました。高架下に住む人のダンボールハウスで原因不明の火災が起こり、全焼したのです。誰もが放火だと考えました。ここに住んでいた人は怪我はなかったですが精神的に病んでしまい

病院に入院しました。ここのコミュニティは次々と起こる排除と事件に不安が高まっていき、そうして人間不信になり、お互いそっけない態度になっていきました。

火災跡は、片付けられて、何もなかったようにチリひとつ落ちていませんでした。しかし、壁と地面には、くっきりと炎の跡が黒く刻み込まれていました。私はその黒い焼け跡が、何も光らない絶望的な闇のように見えました。

やむにやまれず、私はその黒い焼け跡が、彗星の尾に見えるように上着の背中に星を縫い付けて、そこに野宿し始めました。それから私の路上生活は始まりました。



いちむらみさこ作（2008年4月28日）

しかし、12月。まず、これでは、寒くて寝られたものではありません。すぐに、駅で寝ている人達がいくつかのダンボールを使って寝ていることを学び、かなり寒さはしのげるようになりました。ところが、そこで予想以上に悩まされたのは、襲撃でした。年末年始だからか、酔っぱらっている通行人たちが私の入っているダンボールを蹴っていったり、叩いていったり、まったくひどいです。毎日ほとんど寝られない。私は近所のダンボールで寝ている人たちに相談すると、「ダンボールから顔が少しでも見えたほうがいい。生身の人間にはヤラないよ」といいます。しかし私は、女の顔を見せると、さらなる被害にあうことが予想されました。その頃、私がダンボールに出入りしていると、男の通行人がやってきて「どうして体を売らないのか」とたずねてきたりしました。

では、どうやって、安全に寝るか。

私は、星のイメージを発展させ、銀紙で星をたくさん作り、黒く焼けた壁や床、そしてダンボールにも貼り付け、キラキラさせることで防衛を試みました。この空間を変え、蹴りたくなる衝動を煙に巻く作戦です。

ダンボールの中、眠りに挑み、何事もなく足音が通り過ぎるよう、星たちに託しました。

しかし、星は破れました。夜中ずっと掃除をしている路上生活をしている人が私の星を掃いてしまったのです。私はダンボールの中でうとうとと寝ていると、パイプ椅子が飛んできました。慌てて、パイプ椅子とダンボールから飛び出したら、男は自転車で過ぎ去っていきました。

私はそれによってとうとう、クジケそうになりました。しかし、あることを聞いて勇気がもてました。この界隈の路上生活者たちが、ダンボールハウスを「ロケット」と呼びあっているというのです。まさにダンボールロケットで眠ることは、まるで宇宙飛行です。何が襲ってくるかわかりません。でも、そう呼び合うことでお互いが繋がり、それは、助け合いと、安眠に、少し近づきます。私は、路上生活が生み出したこのファンタジーに救わ

れ、そして、私の星のイメージとも一致したので、銀紙の星を倍増させ、ひるみませんでした。

そのようにロケットに星を貼り付けて、毎日寝ていると、女の人が寝ているほど安全なのかと思われたのか、隣にひとつダンボールロケットがやってきて、やがて、たくさんのロケットが並ぶダンボールロケット街になっていきました。そうして住人が増えると、襲撃はほとんどなくなっていきました。

寝ることができるようになると、次は食べることです。私は炊き出しや、それぞれホームレス同士で共同食事をしていることを拡張し、この路上でホームレスの人も、そうでない人も一緒に共同炊事と食事をする「２４６キッチン」というプロジェクトをはじめました。ここでは、路上生活している人から地続きにいるそこの通行人たちも一緒にご飯を食べることを目指しています。材料は、街のお店の破棄した食材を使ったり、知人から余った食材を集め、みんなで一緒に調理して食べてます。食べることが生きるための行為なら、一緒に食べることはみんなと一緒に生きる大イベントになります。襲撃をしようとしている人も、おいしいものがあると、一緒に食べるかもしれません。そもそも、おいしい食事というのは、何を食べるのかも大事ですが、どうやって誰と食べるかも重要だと思います。男の人が参加してここで、一緒に作ることで料理を覚えていくこともあります。また、女だからといって料理する必要はありません。作りたくなければ作らなくても食べられます。捨てられそうになった食材を使っているわけですから、食べているだけでも十分役に立っています。もちろん特に役に立っていなくてもいいのですが。

私は、ノラや２４６キッチンで、なるべく楽しく、開かれた空間を作りたいと思っています。

路上生活の女の人や性的マイノリティーの人は、広範囲の街に点在し排除され移動しているので、出会うことが難しいです。そして、出会って同性の人が話しかけたとしても、強く警戒し、怒る人が多いです。それは、彼女たちが安心できるコミュニティにいないので、常に人を警戒しているからだということと、また、それくらい異常でないと、男と同等になれないということではないでしょうか。

女性が野宿をするのはまだまだ、厳しい状況です。これは、ホームレスの問題ではなく、公共の場で弱者が危険な目にあい、排除されるという、路上などの公共性のありかたの問題だと思います。

最近、この路上での公共性の変化に、ひとつうれしいことがあります。去年私が、路上で寝ていた襲撃の多い場所では、今年は襲撃がかなり減りました。それは、年末年始の日比谷の派遣村が多くのメディアに取り上げられ、それによって市民のまなざしが大きく変わったからだと予想されます。これはほんとうに助かったと思うのと同時に、ホームレスのイメージがメディアによって大きく左右されることを痛感しました。

しかし、派遣村では、女の人が数人しかいらっしゃらず、メディアはほとんど取り上げませんでした。日ごろから、メディアが女の人たちを紹介しないので、女たちはそこへ行きにくくなっています。私自身、今住んでいるテント村に初めて

訪れた時、男ばかりの住人の村の中に女の姿を探し、ここにいられるかどうかの懸念があったことを覚えています。

事実、家を出て死のうとさまよった後、親切なホームレスに出会って助かったという女の人が少なくありません。今でも家を出て、さまよっている人はたくさんいるはずです。なのに、その人たちが見えないのは、その女の人たちがたどり着ける安全で安心できる場は、未だ見当たらないからだと思います。去年、9月に女性と貧困ネットワークが立ち上がりました。そこでは様々な立場の女たちが、女の貧困の実体が見えてくることを目的に集まって活動しています。ノラもその活動に参加しています。

私は、ホームレスの女の人を不幸の代名詞にしたくありません。確かに女の人が、路上生活をするには厳しい社会です。でも、以前いた家や家族は彼女をもっと苦しめたのかもしれません。

暴力や性暴力を受けたり、非難されたり、排除されたりするのは、貧困であったり、路上生活や女のせいではないのですから、楽しむことを奪われたくないと、強く思います。

そうして、まだまだ閉ざされた社会に、創造力を使って隙間を作り、そこをぐわっと開いていきたいです。